

音との対話，自分との対話 —フレッシュャーズ・セミナー教育実践報告 その2—

吉 仲 淳

キーワード：「サウンド・エデュケーション」「音」「環境」「学び」「身体知」
「きく」

はじめに

この教育実践報告は、青山スタンダード論集第3号（2008年1月16日発行）に掲載された同名の実践報告「音との対話，自分との対話—フレッシュャーズ・セミナー教育実践報告その1—」の継続研究としてまとめられたものである。

そのことについては、すでに実践報告その1において以下のように記されている。

本教育実践報告は、「教育実践報告その1」と「教育実践報告その2」の2つに分けて報告を行うこととする。

まず「教育実践報告その1」において前述のような今日の問題を認識した上で、2004年から3年間にわたって行われてきた筆者自身が担当するフレッシュャーズ・セミナー（サウンドスケープ：音との対話 自分との対話）の概要やその目的及び方法、また本講座を進めるにあたってのテーマとなるものや背景的理論を再考する。

そして「教育実践報告その2」では、これまでの授業記録（エピソード）や学生が提出した課題などをもとに本講座における教育実践内容を報告し、受講学生の授業内での取り組みを通して、現代の学生がどのように自己不在化され、方向性を見失っているのかという現実を受け止めながら、本講座に

おいてどのように学生とのかかわりを持ってきたのか、そして持つべきなのか。また学生自身はどのような関わりを求め、何を必要としているのかなどを分析、考察する。

(青山スタンダード論集第3号『音との対話, 自分との対話—フレッシャーズ・セミナー教育実践報告その1—』より)

筆者はこれまで青山学院大学において音楽表現・音楽教育を専門領域として研究・教育を行ってきた。その中でも筆者が担当するフレッシャーズ・セミナーでは、音を用いた様々な取り組みをもとにして音との関わりや音本来のあり方、そしてその環境について考える「サウンド・エデュケーション」を実践してきたのである。

今回の「教育実践報告その2」では、「サウンドスケープ」「サウンド・エデュケーション」の発祥の地である Simon Fraser University (BC, Canada) において、2012年から2013年の在外研究期間に筆者自身が作成した新たな音楽教育プログラムをもとに、帰国後(2013年以降)フレッシャーズ・セミナーにおいて行われた様々な活動内容の報告を中心に行うものである。また「教育実践報告その1」において報告された現代の学生が抱える諸問題についても再考するとともに、2008年以降も様々に変化を遂げる社会のあり方や学生の動向などを鑑みつつ、大学においてどのような初年次教育が今日必要とされるのかを検討するものである。

I 問題の所在およびテーマ設定の理由(筆者自身の備忘録として)

この授業を行う上で、常に認識しておく必要がある事柄がいくつか存在する。担当者として確認すべきこれらの事項について、まずここで述べておく。

1. 青山としてのスタンダード

初年次に履修される「フレッシャーズ・セミナー」は、全学共通の教養科目である「青山スタンダード科目」の一つであり、本学における特色ある教育の

一つとして2003年より開講されている。開講以来、学生の興味関心を刺激している青山スタンダード科目は「青スタ」の愛称で親しまれており、学内だけでなく学外にもその認知度が高いプログラムであるのだが、開講当初より以下のようなミッションがあるということをまず忘れてはならない。

「どの学部・学科を卒業したかに関わりなく、一定の水準の技術・能力と一定の範囲の知識・教養を備えているという社会的評価を受けること」

これは青山での学びというものがスタンダードになりうるために必ず確保しなければならない研究・教育における質の保証であると考えられる。まさに本学として育てたい学生像がここにあり、高等教育機関としての研究・教育上のポリシーをここに垣間見ることができる。

これはあくまでも担当する者の責任として感じることはあるが、ここにはあるメッセージを感じざるを得ない。それは「これが青山ブランドであるという見極めができるようにしろ。」というようなハイレベルな要求であり、かつクリアする必要のあるものなのであろう。

しかしその要求はまぎれもなく青山学院という一大学から送られてくるようなスケールのものではなく、我々が現在生きている社会からの要求であるのだと捉えた上で、この授業を担当しなければいけないのであるということも忘れるべきではないと考えるのである。

大学のカリキュラムにおいて、各学部・学科で開講されている専門教育が、たとえば枝葉を伸ばし、花をつけ結実するためのツリー（樹状）型であるとするならば、この青スタの存在は、その前段階として太く強い根を張り巡らせながら樹木として健やかに育ちゆくための土壌を耕すことにより、将来たくさんの実をつけることが期待できる環境を構成するというリゾーム（根茎）型の教育として位置づけられる。各学部・学科での専門領域を支えるための環境や基盤を形成するとともに、各学術分野への登竜門としての役割を担うもの、それが青山のスタンダードであると考えられるのである。

2. パラダイムの転換：「教育」から「学び」へ

その中でも「フレッシュヤーズ・セミナー」は一年次に配置された科目の一つであり、学生がこれまでに受けてきた高等学校までの「教育」から大学における「学び」へとシフトするための契機とされ、早い段階から「学問的な作法」を身につけること、すなわち大学で行われている「学び」について学ぶことがそのテーマとされているのである。

この「教育」から「学び」へというパラダイム転換は、この時期最も重要ななかを学生にもたらすことになると考えられる。それは新しい視点であったり、考え方の方向性やその多様性であったり、あるいはこころの所在すなわち意識であったりと、学生生活において様々な形で影響を及ぼすのであろうものを提供するのである。

前回の教育実践報告においても言及したことではあるが、この転換によって得られることそのものが、まさに今日において自己不在化し、進むべき道を見失ってしまった学生にとって必要とされるもの、すなわち「大学生たる身体観」であるのではないだろうか。その重要とされるパラダイムシフトを受け入れる環境整備としてこのような授業が配置され、それらは様々な学問分野での研究活動を展開する専任教員とバラエティーに富んだ学部・学科から受講する20名ほどの学生が一つのクラスに集い、ゼミナール形式での授業（写真）において活発な意見交換を行

なう。そしてそこでは、発見される問題やその解決方法、研究を推進するための技法やスタンス、それを表現するためのプレゼンテーション技術の獲得などを目指し、多様性を持った環境下において



フレッシュヤーズ・セミナー（筆者担当）の様子

も、他者と同じであることを前提とするばかりではなく、他者との相違に気づきながらやりとりを重ねることで多面的、多角的な分析能力を養い、より本質を見極めることができる力を育成することなどがその目標とされているのである。

3. この授業を行う理由として：今日における学生のあり方

このような「音」を題材とした感覚的な授業を行うこと、それも大学における学びの登竜門であるとされる初年次教育の一環として行うことについては、いくつかの理由が挙げられる。

まずその一つとして、今日の学生の気質やその態度について危惧されることがある。

前回の「教育実践報告その1」では、学生の「学ぶ」ことに対する意識の低さがこの授業を行うための理由となり、そこに働きかけることこそが原動力となっているということを述べた。学生時代における「学ぶ」ことへの意識とはすなわち人として生きることへのモチベーションにつながっており、成就したい自己をどのように実現するのかに直結しているものであるということに言及した。

しかしながら現代の学生にとってもこの傾向は変わってはならず、今日の大学での学びにおいても顕著であると筆者は感じている。今日の大学生活において、学生自身が何を求め、そのためには何をすべきなのかというようなビジョンを持ち、実現したい自己像をデザインし具現化しようとするポジティブな態度や姿勢はあまり見られることはなく、まったく主体性に欠ける自己不在な時間が連続していると言えるような空間を形成しているようなのである。

本来、大学生活というものは憧れや夢などに向かって努力する自分を自分自身が尊重し、優先し、期待しながら進めていく空間であり、その自己実現を目標としながら自由な発想のもと、学生の本分である学業を推し進めることにより、人生において最も重要とされる時空間が生成されるのであると考えられるのである。

しかし実態としては全くその逆であり、たとえば前述したような大学生生活をポジティブに謳歌している学生は、どちらかといえば周囲から「まじめ」「暑苦しい」「重い」「うざい」などと中傷され、特殊な扱いをされかねないのも事実である。

以前フレッシャーズ・セミナーにおいて、キャリアデザインや将来設計などについてのディスカッションを行なったことがある。その中で、たとえば高校での進路指導やキャリア教育、特に大学受験を決定する際に、学びたい大学や学問領域あるいはフィールドなどについて考えていたかどうかを学生に質問した。その質問には、ほとんどの学生が「なし」と答えた。その理由には、機械的ともいえるような決定方法があった。それは受験前の自分自身の成績を考慮した上でランク付けをし、その上で受験できる大学について決定するというものであったのである。それはある意味、安全を考慮した上でその結果を予想した判断なのではあるのだが、そのエピソードから推測するならば、おそらく彼らは自分自身のこれからの人生に想いを馳せ、夢や憧れとともに将来的なビジョンをつくったり、どのような未来に向かって努力を重ねていくのかというようなキャリアデザインなどを考慮する余地すらも与えてもらうことがなかったのではないだろうか。そして目的や意義を見いだせぬままに勉学に励み、大学受験をただ人生の必然として行ってきたのであろうと考えられる。そこには自分の人生において自己実現しようとするような目標や方向性を掲げながら熟を帯びていく自分を確認する暇もなければ、モチベーションや努力、あるいは忍耐などについてもまったく感じることもない無機質な時間だったのではなかったのだろうか。またこれは、今日における少子化に伴う大学全入時代ということも相まって受験勉強のための努力や合格の喜びというような実感も味わうことが少ないあるいはない状態を作りかねない。自分自身の人生における出来事でありながらも自らが当事者として介入できない（しない）ようなシステムとしてのラインに乗せられ、大学へと進学をしてきたかのような自己不在な姿を感じてならないのである。

しかしそのことについて語ろうとする学生はまだマシな方で、「我ここにあ

らず」と言わんばかりの他人行儀なスタンスで、何も言わずただそこに座っている一見おとなしいような学生が、実はとても難しく、そして理解し難い。授業の時間となれば、何をするでもなくただ席に着き、そして退室時に出席カードを提出する。まさにその様相は、二十歳前にしてすでに悟っているかのような妙な落ち着きと何の苦労もなく若くして身の程を知ってしまったというようなニヒルな体（てい）なのである。

前述したような授業での活発な意見交換を通して発見される問題やその解決方法、そして研究を推進するための技法やプレゼンなどの技術の獲得を目指し…というフレッシュャーズ・セミナーへの想いとは裏腹にこのような受講学生も存在するわけなのである。

無論、このような状況はフレッシュャーズ・セミナーだけではない。筆者が担当するその他の授業においてもこのような状況が見受けられるのである。このような今日の大学における学生の様子、特にその授業態度や履修意識を確認するにつれ、主人公であるべき学生のやる気の無さやその様子を一教育者として見逃すわけはいかないのである。

以上のような今日の現状を考慮した上で、学生自らが「大学生たる身体観」を得るための模索できる環境をどのように設定し、それを具体化するためには、どのような方法を授業において行ってきたのかをここで報告したい。

Ⅱ 教育実践報告

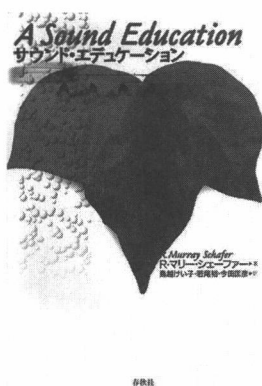
1. 本授業の方法：「サウンド・エデュケーション」について

私たちがここでテーマとするのは音であり、目的とするのは人々に音をより良く聴くことを教える方法を示すことである。音楽家としてその必要性を私なりに感じているのは言うまでもない。が、声や音によるメッセージの交換がおこなわれている限り、聴くということはいかなる教育においても重要なことである。望むと望まざるとに関わらず、私たちはいつも何かを聴いている。

この文章は、マリー・シェーファアの著書『サウンド・エデュケーション』（写真）の序文の一部である。この書物は彼自身が考案した概念「サウンドスケープ」の基礎となる考え方をもとにして自らの音楽教育実践や音環境の研究調査から生み出した教育方法を100の設問にまとめたものとされる。

筆者が担当するフレッシュャーズ・セミナーにおいて常に登場する「サウンド・エデュケーション」というこの言葉は、本授業のテキストとして扱っている書籍のタイトルでもあるが、特に今日においては教育方法の一名称として知られるようになった。これは、そもそも音楽教授法の一概念あるいは一教育方法として昔から存在し認知されていたような言葉ではない。

この「サウンド・エデュケーション」という考え方は1965年、カナダヴァンクーバー郊外に創立したサイモンフレイザー大学（Simon Fraser University）教育学部（Faculty of Education）にて開学当初より教鞭を執っていた作曲家マリー・シェーファア（R. Murray Schafer 1933-）によるものであり、彼自身が持っている音楽教育や教育全般に対するヴィジョンや音を研究対象とした環境調査の成果、そして何よりも彼自身の作曲者としての音楽活動実践から生み出したものである。そして1968年には同大学にコミュニケーション学部（School of Communication, Faculty of Communication, Art and Technology）が新設されるとともに教育学部より移籍し、研究内容を人と音環境との関係へと関心の矛先を向け、学部内にカナディアンドナー財団、ユネスコ、数人の関係者等からの資金援助を得ることにより「世界サウンドスケープ・プロジェクト（WSP）」を立ち上げた。その活動は人間が生きている音響環境の改善のために捧げられ、音響学、地理学、心理学、都市学、美学などを横断的に研究するものであるとし、1975年までの10年間にわたり世界の各地域の音環境について調査研究を精力的に行った。ここで彼が提唱したサウン



ドスケープ (Soundscape) という概念とともにこの「サウンド・エデュケーション」という発想もアメリカやイギリスなどで活躍する現代の音楽教育者に影響を与えながら世界中に広がりを見せ、今日では音楽をはじめとする教育全般において一つの理念あるいは教育方法と認識されているのである。



WSP の創設メンバー (左端がマリー・シェーファー) : サイモンフレイザー大学にて撮影

「近代では音を環境から切り離し、あまりにも客観的に取り扱ってきた。そこでもう一度音を風景の一部として捉えながら音と環境の本来的な関係性に注目し、日常生活やその環境の中で音をどのように取り扱っているのかを再考し、音そのものの在り方や聴取する（聴く）という行為について再考する。」

これはマリー・シェーファーの言葉である。「サウンド・エデュケーション」は我々の生活において聴くという行為に、我々がすでに忘れてしまっているパラダイムやその意味があることを思い出させてくれるとともに、視覚優位な世界において聴くことの豊かさを再び与えてくれるのである。音を聴くという行為。それはまさに人間が人間たる存在感の中で生きるための復権の方法であるのだと感じてならないのである。

しかし彼の研究は決して順風満帆なものではなかったようである。3年前に筆者がサイモンフレイザー大学を訪れた際に行った教育学部音楽担当主任 Dr. Yaroslav Senyshyn (ヤロスラフ・セニシン教授：ピアニスト/音楽哲学研究家) へのインタビューによると、当時マリー・シェーファーは、いわゆるルネッサンスマン（提唱者）として問題を抱えていたのも事実であったようである。当

時のカナダでは、既存の教育（音楽を含む）を守ろうとする保守的な考え方により、あまりにも革新的であったマリー・シェーファーの考え方が理解されようとはせず、結果的にそれまで所属していたサイモンフレイザー大学から追われることとなったのである。それは、当時の教育（音楽教育）実践者が求めていたものとはかなり乖離していたようであり、今日のカナダにおける音楽教育実践においてもこの状況は依然としてあまり改善されていないのが実情であることもセニシン教授より重ねて報告された。

カナダ音楽教育学会誌の一つである『カナディアンミュージック・エドゥケーター 50-4 2009 夏号 (CANADIAN MUSIC EDUCATOR VOLUME 50 - NUMBER 4 SUMMER 2009)』の中で、マリー・シェーファーの考え方を紹介するこのような記事がある。

音楽教育に関するマリー・シェーファーの著作物は、一冊の本としてまとめられました。1976 年の『創造的音楽教育 (Creative Music Education)』です。当時、5 冊であった小冊子風の著作物は 1965 年から 1975 年までの間で別々に刊行されました。この 10 年の間、マリー・シェーファーは彼自身のアイデアと概念を共有しようと生徒や音楽教師といっしょにワークショップを行いました。彼の考えの多くは、当時とてもラジカルでしたが、今日の教室では一般的なものになってきています。たとえば、協調学習 (コーポラティブ・ラーニング：生徒に小さなグループ内で共に学習させる) は、今日の教室でよく使われます。ハワード・ガードナーの研究と彼のマルチプル・インテリジェンス理論：多重知性理論) は、他の学問分野や領域とのアートコラボレーションのためのドアを開けました。マリー・シェーファーが「芸術の統合」と言ったことは、クロス・カリキュラム (総合学習、合科学習) の材料として発展しました。そしてグラフィック記譜法 (図形楽譜) のような構成技術とそのための電子器具の使用は、過去 50 年をとおして現代作曲家に用いられています。今日の観衆は新しい音楽のひとつとしてこれらの音をより知っています。マリー・シェ

ーファ어의開拓者的な研究がようやく今日の教育制度に採用されたように感じます。

しかし、現代のサウンドスケープ（音環境）はどうでしょう？マリー・シェーファ어は、自然や人間が作る環境音への認識を創りたかったのです。彼は、最新のテクノロジーの脅威による音そのものの損失を心配しました。しかし、今日の環境では、どこにでもある個人の音楽プレイヤーなどの使用は、さらにサウンドスケープを無視するのに役立つだけでした。我々の回りにある雑音を遮断し環境を改善する代わりに、我々は単にそれを無視するために、テクノロジーを使用しているのです。公開されたレッスンやコンサートは、音がヘッドホンの外側で再び奏でる機会を生徒に提供します。その活動はより小さい小学生に対して、聴くという経験を促し、音楽を分析し、そして制作する機会を与えます。その主眼には「活発な参加」があります。

この活発な参加を通して生徒は、誰でも音楽を制作することができ、それはシェーファ어의信念に沿うものとなるのです。彼のこの言葉のように。

「音楽は、最も魅力的で美しい音のコレクションであるだけでなく、良い耳をもった人々によって作られ、親しみをこめて記憶されているものなのです。」

(Kim Soleski Ward “Musical Soundscape : Teaching the Concepts of R. Murray Schafer to Elementary Students” キム・ソレスキ・ワード著『音楽的サウンドスケープ：小学校児童へのマリー・シェーファ어의概念を用いた音楽指導』 筆者訳)

1965年から1975年の間に刊行された5冊の著作は、マリー・シェーファ어의音楽や音楽教育に対する考え方を著し、当時の一般的な音楽教育書とは一線を画するラジカルなものであったようである。

マリー・シェーファ어によって書き表されたこの5冊の書物『The Composer In The Classroom (教室の作曲家)』1965年『Ear Cleaning (イヤー・クリーニング)』1967年『The New Soundscape (新しいサウンドスケープ)』1969年『When Words Sing (ことばが歌うとき)』1970年『The Rhinoceros In The Classroom (教室の犀)』1975年それぞれの根底にある基本的なコンセ

プトこそ、この時代に刊行された音楽教育書とは決定的な違いがあったのである。それは簡単に言えば、切り口の違いである。「音楽」という文化の一部分に目を向けてきたこれまでの音楽指南書とは違い、「音」を切り口にすることによって生活・文化全体に目を向けようとするアプローチであった。それはあくまでも「ミュージック・エデュケーション」ではなく「サウンド・エデュケーション」であり、これまで聴覚を音楽という領域に向けることで「音楽（芸術）の美学」についての理解を育んでいたが、視点を「音」という着眼点に拡大することによって「生活の美学」へと展開された。そして内容的には「音楽」をテーマとするものがあったとしても、学ぶ側にとってはこの着眼点により、以前感じられた「音楽」との距離がより近付けられたと考えられるのである。

先に記した記事からもわかるように、50年近くの時を経てようやくこの考え方が理解され、必要とされる時代となってきたのである。マリー・シェーフアーは当時から音楽教育において未来志向な実験的試作を重ねていたからこそ、その当時の音楽教育者からはラジカルな教授法として扱われていたのだろう。その考え方は、まさに「音楽教育」という枠にとどまらず「教育」あるいは「全人教育」というような広範囲なものを想定しているのが認識できる。そこには、立ち止まることがない積極性あふれる未来志向な人間形成を感じざるを得ないのである。その考え方は既存の概念などを真っ向から否定するだけではなく、ある意味、そのようなものに対して攻撃的なスタンスを取るような印象をも与えるほどなのである。

2. 授業での活動実践例

実践事例その1：教育信条の紹介

第1回の授業において「オリエンテーション」と称し、本授業の内容やその進め方、そして単位認定のための評価方法についてなど、できるだけ詳細な説明を行うことにしている。その際、必ずマリー・シェーフアーの著作である『The Rhinoceros In The Classroom（教室の犀）』の一部を引用し、この授業を担当するスタンスや心構えなどを紹介することになっている。

これはマリー・シェーファー自身の教育に対する考え方、すなわち教育信条である。この1から10までの文言は教える側から表現された信条である。これらは当時の教育に対して変革を求め、新たな視点を模索をしようとするマリー・シェーファーの強い姿勢がうかがわれる。

1. 教育改革実践の第一歩はそれを採用することだ。
2. 教育では、失敗は成功より重要だ。成功物語ほどもじめなものはない。
3. 危険をおかして教えよ。
4. 先生たちはもういない。学習共同者があるだけだ。
5. 他人のために教育哲学をあみ出すな。自身のためにそれをせよ。何人かがそれをわかちあいたいとおもうかもしれない。
- 6 省略
7. 古いアプローチでは、先生は情報を持ち、生徒の頭はからっぽ。先生の目標は、生徒のからっぽの頭に情報をおしこむこと。
8. 反対に、授業は無数の発見の時間であるべきだ。このことがおこるためには、先生と生徒はまずお互いを発見しなければいけない。
- 9 省略
10. 教えられる事柄は、間に合わせのものにすぎない。確かなことは神のみぞ知る。

(マリー・シェーファー著 『The Rhinoceros In The Classroom (教室の犀 高橋悠治訳)』より)

先にも記したが、これを紹介するのは15回の全授業回数において初回のたった一度のみである。

しかしシェーファーのこの書物において掲げられた教育信条を引用しながら、筆者が担当するフレッシュャーズ・セミナーの基本的な理念やスタンスなどを紹介する授業内容においては、例年、学生からかなりの反応があることを筆者はひしひしと感じている。筆者は学生に対して、そのシェーファーの考え方

についての印象や感想などを発表させたり、リアクションペーパーなどに文章としてまとめさせるようなことはしていない。なぜならば、それを聴く学生の表情（真剣な眼差しや穏やかな顔つきなど）や共有する空間（教室内の張り詰めた空気感など）などのいわば間主観的な関係を感じさせる材料から、学生がまさにその内容に触れ、感じ取っている内面的な学びのプロセスの途上にあるという認識を筆者はこれを紹介するたびに持ってしまうからなのである。

このようなある意味、攻撃的でラジカルであるような教える側からの視点を学生に紹介しながらこの授業における取り組みやそのスタンスについて説明することは、結果、この教育信条そのものが授業におけるマニフェストのようになってしまい、いささか挑戦的な方法となって筆者自身でハードルを上げかねない。しかし、それでも毎年行われる初回の授業においてこの書物の一部を紹介することに意義を感じるのである。初回でのこの場面において、目の輝きや納得したかのような穏やかな表情などの学生の身体から発信されるリアクションを筆者は自らの身体を通して実感し、学生の感触や想いを受信し共有しているのである。これはあくまでも筆者自身の主観的な見解でしかないのであるが、あたかもこれまであった何かから解き放たれたかのような学生の雰囲気もかさねて感じざるを得ない。筆者が抱くこの特別な感触は、学生が入学時に持つ大学に対する固定的なイメージに深く関係していると筆者は常々考えている。

入学時、学生が抱く大学についての様々なイメージ。このことについても時折、学生と話すことがある。

ほとんどの学生は、入学とともに大学生活に関する様々な事柄について想像を膨らませながら夢を描くとともに具体的な計画を立て、将来において実現すべき自分自身について想いを馳せる。その中の一つに「大学ではどのように授業を受け、学ぶのか?」というような履修についての疑問が出てくるようである。例えばその具体的な疑問の中に「どの授業が難しく、単位取得が困難か?」「どの教官の指導が厳しいのか?」などがある。それらについては、たとえば授業評価の結果や先輩の評判など情報を収集し、それを参考にしながら検討し

ていくことが可能である。しかしそのような問題とは裏腹に、ある大きな課題が立ちはだかる場合がある。それは「自分は大学という新たな環境においてどのような立場で授業を履修し、単位取得を目指すのか？」というような自分自身が持つべき心構えについて検討すべき課題が出てくるようなのである。この課題は「どのようにして単位を取るのか？」というような直接的で、ある意味すぐに解決できるような問題などではなく、学生自身のキャリアデザインや将来などにも関連する大きな課題となる可能性を孕んでおり、4年間の大学生活すべてを通してこの問題と向き合う学生もいるのである。

今日、高大連携などをテーマとした接続教育が盛んになり、オープンキャンパスなどでもその体験を通して大学という環境について検討したり、受験する大学についてのある程度の情報を高校の時代に確保できるようになったと考えられる。しかしながら、そもそも大学での学びにおいてどのような心構えを持ち、自分自身がどのような形で生かされていくのかということを検討するだけの十分な情報を学生自身は大学入学当初に持ち合わせてはいなく、想像の枠でしかそれを語ることはできないのである。

無論、ここに挙げたような学生ばかりがクラス内に存在するわけではないのだが、その中にはあまり意識もせず、以前経験した高校での教育とあまり変わらない認識をもったまま大学での授業に取り組み始めるような姿が見受けられるのも少なくはない。

このポイントがまさに大学における専門教育への登竜門であり、高校などでこれまで受けてきた「教育」から大学における「学び」へと移行するための契機、すなわち学生にとっての新たな世界への誘いがあるのだと筆者は考えるのである。

実践事例その2：「ブラインドウォーク」から「リスニングウォーク」へ

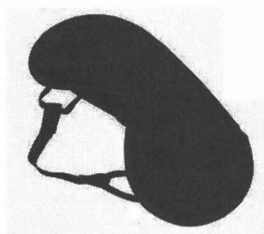
サウンドスケープをテーマとする活動には様々なものがある。先に紹介したマリー・シェーファーの著書である『サウンド・エデュケーション』は、音にまつわる100の設問が我々に対する課題としてまとめられているが、その課

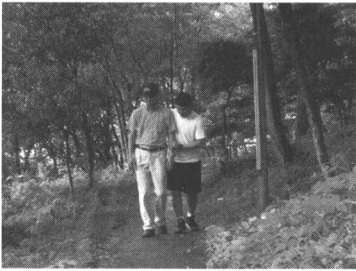
題への導入はとても明快であり、まさに我々へ問いかける形式となっている。たとえば課題7, 8, 9番にあるような特定された一種類の音に耳をかたむけるような音の類型的聴取に関する課題であったり、また15, 16, 17番にあるように我々の日常生活において耳にする音、たとえば「今日聞いた一番大きい音は?」というような音日記の課題のようなものであったり、はたまた29番にある「太った重たい者が出す、高くて細い音は?」という、一見なぞなぞのようなものまでバラエティーに富んだ構成になっている。

それら『サウンド・エデュケーション』にある100の課題の中でも、最も基本的な取り組みであり、まず授業において最初に行う活動は、音を聞きながらその周辺の散策をする「リスニングウォーク」であろう。ここに書かれているほとんどの課題は、まさにこの活動がベースとなっているといっても過言ではない。我々が生きる環境において（範囲を設定した上で）、そこにある音やその風景にあらためて注目することにより、我々自身や我々の生活そのものについて再考するのである。

特にこのフレッシャーズ・セミナーにおいては、学生がリスニングウォークの際、全身体感覚を用いながら環境にある音をより聴取できるようにするために、その前段階として「ブラインドウォーク」を行うことにしている。

ブラインドウォーク (blind walk) とは、一般的には集団活動でのアイスブレイクやエンカウンタープログラムの一つとして行ったり、グループセラピーなどのカウンセリングの際にラポール構築の促進や相互の人間関係を深める目的で実施される。また、相互の信頼関係や安心感を発見できる散歩であることからトラストウォーク (trust walk) とも呼ばれている。我々の日常生活において感覚機能の80%を占めるとされる視覚を閉ざした状態で歩くことにより、日常とは違った感覚を体験する。その際に必ずアイマスク (写真右) などを使うことで、普段のように目





大学院集中講義でのブラインドウォークの様子

を開いた状態でありながらも視界が遮断されるように設定することが望ましい。

方法としては通常ペアで行い、一方がアイマスクを使用して歩き、もう一方がそれをサポートしながら歩く。時間は一人約30分程度行い、散策中はかならず言葉を用いての会話は避ける。

ここでブラインドウォークを行った様子と、その後に学生がまとめたコメントなどをいくつかを紹介したい。(筆者による授業記録より)

エピソード1 ブラインドウォーク後の所感など

日時：2013年10月11日(金)3時限(第3回)

場所：青山キャンパス

天気：くもり

—授業の経緯—

3回目のフレッシュャーズ・セミナーである。内容に触れる活動が始まりつつあり、受講学生の様子も少しづつではあるが授業内でのやり取りにもゆとりが感じられる。

学生A(男)：最初は身体全体が縮こまってしまい、手だけが頼りであったが、少し慣れてくると冷静になり音に意識がいくようになった。最

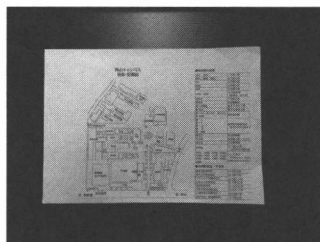
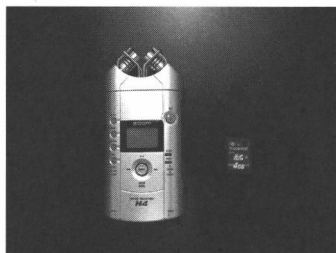
初は人の声ばかりが気になっていたが、後半は少し余裕が出てきたのか、自然の音や機械の音も分かるようになり、その物（音源）との距離感が気になっていた。

学生 B（女）：エスコートしている時、まず最初にどんなペースで歩けば良いのかわからず困ってしまいました。言葉で伝えられないこともあり、特に階段やちょっとした段差のところで歩く速度を変えてみたり、足音でアピールしたりと工夫をしました。ブラインドウォークをした時、パートナーの歩くペースが速くて怖かったです。周りの人の気配がすごく感じられました。音というか、気配です。特に室内に入ると、人がたくさんいる！というのがわかる、こもったような空気を感じたのは驚きました。

音に関しては、視覚を閉ざす分、よく聞こえるのかと思いきや、足の（裏の）感覚やパートナーに手をひかれる感覚に集中してしまい、それまで聞こえていた風の音などが全然つかめなくてびっくりしてしまいました。

受講生にとってこのようなブラインドウォークの体験は、おそらく過去に行ったことのないものであり、強烈な印象と様々な感覚的な体験をもたらしているようである。我々の生活において感覚機能の 80% を占めるとされる日常の動作、例えば散歩などにおいて、いかに視覚優位であるのか、また視覚を閉ざした場合、それ以外の感覚器官を用いながら情報収集に務める我々の身体の仕組みを知ることに驚きを隠せない様子である。筆者はこの体験によって学生の耳を開くこと、すなわち聴覚の覚醒を目指すともに、自身の全身体感覚に意識（ボディ・アウェアネス）を向けることを期待した。自身の身体感覚の意識化、それは自分自身の感覚によって得られた実感、すなわち主観とともに眼前の世界に関わり、自分自身が常に「今ここに存在している」という意識を持つことなのであろう。

このブラインドウォークの体験により、学生の聴覚をはじめとする感覚器官



が覚醒されたあとに必ずリスニングウォークを行うことにしている。

フレッシュャーズ・セミナーでは、リスニングウォークの活動を「フィールドレコーディング」と呼んでいる。通常行われるリスニングウォークは、音を記録するための録音機などを持たないのが一般的であるのだが、本授業においては、活動後の振り返りを行うということもあり、必ずフィールドレコーディング用リニア PCM デジタルレコーダー（写真左）を各グループに一台用意するようにしている。またこの授業でのフィールドレコーディング（リスニングウォーク）は常に青山キャンパス内で行うため、各自にキャンパス内の建物配置図（写真右）を配布している。その地図を用いながら、どこでどのような音を録音するかという計画をグループ内で立てた上で散策を開始するのである。するためにいくつかのグループに分けて行い、できる限り前回行ったブラインドウォークのパートナーとともに体験できるように設定している。

エピソード2 リスニングウォーク

日時：2013年10月18日（金）3時限（第4回）30分程度

場所：青山キャンパス

天気：くもり（台風が接近していたので風が少し強い）

テーマ：自分自身が思う「青山らしい音」をキャンパス内で探し、録音機に収めるとともに青山キャンパスの音環境に耳を傾ける。

—授業の内容—

今回が一回目のフィールドレコーディングとなるため、リスニングワークを行う前に、まずその目安となる音の分類法として『サウンド・エデュケーション』課題2番を紹介するとともにスライドを用いながら分類法についての説明を行った。

まず、自然がつくりだす音にはN (Nature)、人間の出す音にはH (Human)、機械の音にはT (Technology) のマークをそれぞれの音につけてみよう。(中略) 持続していた音にはC (Continuous)、繰り返されていた音にはR (Repetitive)、一度だけの音にはU (Unique) のマークをつけなさい。

(マリー・シェーファー著『サウンド・エデュケーション』課題2番 (p. 12) より)

この課題2番は前半に「何の音か?」(音源)、後半に「どんな音か?」(性質)という二種類の分類法が示されている。学生には、たとえば「N-C」「T-U」のような形でその2つの分類法を組み合わせ使用し、また音源が特定できないものに関しては?マークをつけて分類するように提案した。

そして筆者は学生がリスニングワークへと出かける直前、前述した録音機器の使用方法を説明するとともにフィールドレコーディングについての考え方などを以下のように伝えている。

筆者:「フィールドレコーダーに入っているSDカードは記録媒体といわれる情報を記録するためのメディアです。あくまでも音がある場所に赴くのは自分自身ですから、記録媒体に任せっきりにならないで、自分の耳を使って、たとえば自分自身はその音をどのように感じたのか? その空間はどのようなものだったのか? など、記録媒体に録音できないものを記憶してきてください。フィールドレコーディングとは、フ

フィールドを録音する作業です。音だけを記録するだけでなく、その場の空気や雰囲気なども録音機に収めてきてください。録音から戻ってきたら、音に関してのいくつかの質問に答えてもらいます。」

学生がフィールドレコーディングから戻って来るまでに、「青山の音環境に関する質問」として以下のように黒板に書き記し、活動後のグループでの振り返りとともにまとめとして回答できるようにした。なお、録音した「青山らしい音」については、次週の授業でそれを聴きながらディスカッションを行うことにした。

—青山の音環境に関する質問—

1. 一番きれいだと思った音はなんでしょう。
2. 一番小さい音はどんな音ですか。
3. キャンパス内に必要ではないと思われる音。
4. 自分との距離が一番遠くに感じられた音。
5. 音源が特定できない音。

なお、音の種類や発見場所はできる限り詳しく説明しなさい。

ここで2人の学生A、Bがフィールドレコーディング後にまとめたコメントを紹介する。2人はパートナーとして、事前に相談した「青山らしい音」(17号館食堂のにぎわい)を目指して散策ルートを決定し、同じ空間を歩いてきたのだが、上記の質問に対してまったく違った音をあげている。2人のコメントからは、自身の慌ただしい学生生活の中で意識できていなかった自分の環境が音によって再認していることが窺い知れるとともに、音との関わりやその捉え方がまったく違っていることにあらためて気づかされる。

学生(学生A、Bのペア)のコメント(筆者の授業記録より)

散策ルート（学生 B の記録より）

まずはメインストリートを通してガウチャーへ。そこから間島記念館の横を通って短大に出ました。そこから3～6号館を通り10号館へ。最後に、17号館と1号館を通ってきました。

学生 A（女）

- ・青山らしい音：17号館食堂の音（にぎやかな話し声など：HまたはT）。

理由 常に人で溢れかえっていて、音からも人口密度の高さやそのにぎやかさをうかがうことができるだろうと考えたから。

- ・青山の音環境に関する質問

1. 警備員の方が腰に下げている鍵がチャラチャラと鳴る音。（H-U）
2. 荷台の台車の音：遠くに見えていたが、音はよく聞こえていた。（T-U）
3. 特になし
4. フィットネスセンターの音：中まで入ることができなかった。（T-R）
5. 特になし

—その他、気づいたこと—

本当は大学生とともに幼稚園児や中・高等部生の声を録りたかったが台風が近づいていることもあり、人通りが少なく、いつもより物静かであった。

その他、特に購買での様々な音（レジの音：T-U ランチパック（商品名）を手取る音：H-U 飲み物のケースを開け閉めする音：H-U など）を確認できた。

学生 B（女：学生 A のパートナー）

- ・青山らしい音：学食（17号館）の人の声（H）

理由 たくさんの人が集い、とても学院らしい活気溢れる空間だと思う。

・青山の音環境に関する質問

1. ガウチャーのオルガンの音：一番に思い出せる音。(T-R)
2. 外の通りを走る車の音：(場所によっては) 遠くに聞こえる。(T-R)
3. 工事の音と時折聞こえる車の音：常に耳につく(耳障り)な音。(T-R)
4. 2と同じ
5. おそらく工事の機械音：ガンガンと鳴り響く音。(？ T-R)

—その他、気づいたこと—

メインストリート：風が強く、木の葉の音がよく聞こえました。人は少なく風などの自然の音が多く感じられました。

ガウチャー・メモリアル・ホール：オルガンの音、英語で会話する声が聞こえました。外の音がシャットアウトされ、遮音された非日常的な独特の空気感を感じました。

10号館へ：人の気配が感じられず、狭い中庭には木々が多くあり、風の音を強く感じました。

学食、そして購買へ：学生で溢れかえり、人の声と椅子をひく音が多く、機械音(自動ドア、コピー機、空調など)が耳に入ってきました。

今までそれほど意識はしていませんでしたが、場所によっては(特に7号館のそば)キャンパスの外の通りを走る車の音が意外に聞こえるなあと思いました。私は自然の音より機械または人の音に注目してしまう傾向があるのでは、とあらためて認識しました。

このようなフィールドレコーディングを伴ったリスニングウォークを行うことは、15回の授業において数回ほど行われている。各回それぞれのテーマを設定し、その目標となる音を求めてフィールド(屋外)に出るということは、学生にとってある意味を持つものであろう。それは、これまで「教室」というものが象徴してきた学校教育という固定化されたイメージからの脱却を意味し、これまでどおりの座学的なイメージからは開放され、いまだ経験したことのない環境での学びの実践が行われるという期待感でもあるといえる。

たとえばある回においては「静けさ」というテーマで、キャンパス内にある最も静かだと思われる場所を訪れ、その音環境を録音機などで記録するとともに「静けさ」に対する自分自身の捉え方などについて検討することを行っている。またある回では、我々が日常生活においてよく耳にする音、たとえば足音や鍵の音などに焦点を当て、無意識のうちに聴いているのであろう生活音をあらためて聴取し、そこからどのような情報を得ることができるのかを検討する。そのためには日常生活の中でまったく意識することなく用いている身体感覚をとおして、我々を取り巻く環境についてあらためて再認識し、それを言語化することにより、他者の考えや存在に触れながら自分自身を発見していく。このように音を用いた様々なアプローチを重ね、授業を構成しているのである。

このような学びのプロセスには、常に二つの教育的空間が存在するのではないだろうか。

その一つは自分自身の interior（内面的空間）であり、そしてもう一つは自分自身の exterior（外面的空間）である。言い換えれば前者は自分自身のセンス（感性）であり、後者はその感性に刺激を与えアクティベートさせる環境そのものであると考えられる。このような2つの空間に対しての認識を持った上で、それぞれの空間を行き来しながら関係性を保つこと。それによって自分自身のあり方を識る能力こそが身体に宿る知能、すなわち「身体知」と呼ばれるものである。

身体知は、瞬間的であり即興的なやりとりの中に力を発揮するものである。そしてその知能の獲得には、生きている実感やその肯定感とともに自分を取り巻く世界とどのように繋がるのか、そして環境にどのようなかたちで対峙するのかなどをあらかじめ検討し、それを実践することが必要不可欠となる。それは自分自身の身体と世界とを結ぶアーティキュレーション（接続方法）を考えるということであり、それを実践するということとは、まさに自己を表現するということなのである。

「自己を表現する」ということ。それは、その人自身のあり方そのものである

り、人として生きる上で必要不可欠な営みであるといえる。その人としての歩み、つまり人生のすべてが人間としての学びとなるのなら、人生の一部を切り取った大学生活そのものがその時代における学びのプラットフォーム、すなわち学びの場「教室」に成り得ると考えることができるのではないだろうか。そしてその「教室（人生）」において学ぶために必要となる身体、つまり「大学生たる身体観」の模索がまさにここで必要となるのである。

3. まとめ

今回の教育実践報告では、授業内でのいくつかの取り組みについて紹介し、学生が提出したコメントなどからその反応を事例として取り上げ、その関わりの本来的意義などについて考察をしてきた。

この実践報告において取り上げたい授業の取り組みは、今回紹介したもの以外にもたくさんある。たとえば最終の授業においてプレゼンを行い提出する課題として、例年『音からみる自分の歴史』というものを課すことにしている。これは以下のように時系列的な項目分けをした上で自分自身の学びや育ちの環境（物的・人的）を振り返るもので、そこには必ず音が存在する。

課題の主な内容は、以下に示した通りで、そこに存在するのであろう音とともにそのエピソードをエッセイ風にまとめ、参考となる画像なども添付し自分史としてまとめるというものになっている。

『音からみる自分の歴史』

1. 生まれたころの音：どのような出生の状況であったのか？乳児の頃の環境について。
2. 幼稚園、保育園での音：初めての友人など、親から離れた生育環境について。
3. 小学校での音：流行した遊びや趣味などの活動。
4. 中・高での音：趣味やクラブ活動などの環境。
5. 現代（大学）の音：現代の興味やライフ・スタイルなどについて。

6. これから出会う音：未来の自分。キャリアデザインなどの将来設計。

特に1番と6番は、学生にとって難しくもあり、やり甲斐のある項目のようである。1番はもちろん自分自身の記憶にはないものであるため、必ず両親をはじめとする家族へのインタビューを経て文章化されるものとなり、あらためてその時間・空間での自分に対する家族の思いや愛情に触れ、それを実感することとなる。また6番は未知のものであり、いわば自分の夢を音を通して語るという項目になっている。

この提出課題はタイトルも自由（任意）であり、例年、書式や表紙などの体裁なども様々に工夫を凝らした面白いレポートが完成する。学生はその本文に添付したいくつかの画像を用いながらスライドを作成し、それらをもとにして内容の濃いプレゼンテーションを最後の課題として授業内で行っているのである。

この最終課題もまさにそうなのであるが、授業内で取り扱う設問（たとえば書物『サウンド・エデュケーション』にある）についての学生の回答やそれをもとにしたディスカッションの内容は、そのほとんどがプライベートに関連する事項となり、ここで紹介することは難しいものが多い。しかしこのような授業という空間において、学生との濃密なやり取りが可能になる空間を構築するとともに、その関係性を保つことができることこそが本授業における一番の成果でもありと考える。

前述したように、初年次の大学生には、この授業を受講することによって「大学生たる身体観」にいち早く気づき、それを自分のものとして育んでほしいという筆者の切なる願いがある。

大学における初年次教育は、今後の大学そのもののあり方の明暗を分けるものであるほど重要であると考え。近年、少子化がすすみ、大学は全入時代へ突入したといわれているのだが、そうであっても受験競争という波を超えることは並大抵のことではない。高校生活において、あるいはその前段階としての

中学生生活においてどのような学びが繰り広げられてきたのか、現状を理解することは難しく、それぞれの環境においてまったくといっていいほど違いがあるのだろう。

しかし確かなことは、その学生にとって大学入学までの道のりが険しいものであったとするならば、大学での学びは、今ここで行われるべき必要のあるものでなければならない。そしてその方法としては、それまでと同じことを繰り返すことは避ける必要があろうと考えるのである。先にも記したマリー・シェーファーの教育信条にも謳われているように、学習共同体に参加している仲間（担当教員およびたの受講生）からの質の良い刺激を受け、触発しあうことにより生きる肯定感を持つことができる場、それが大学における学びであるべきだと筆者は考えるのである。

そのためにも本授業では、これまでの経験や感覚を通して自分自身の身体によって受け止め把握できる素材として特に生活の中にある音や音風景を取り扱い、時間と場所を同じとする学習共同者がその捉え方や考え方などについて相互にやり取りを行いながら共有する空間にすべきだと考えている。そのためにも音の在り方やその関わりについて、あらためて考える必要があろう。

おわりに

音との関わりの中でまず忘れてはいけないことは、「音は見えない」ということである。これは我々の生活においては当たり前の共通理解であり、今さらこのことについて言及するのもおかしいことではある。しかしながら、目では見えない音というものが我々に一体どれだけの生きるためのヒントを与えているのか？物事を把握し理解するための材料として音がどのような働きを我々に対して示しているのか？このような音が本来持っている力を今ここで再考する必要がないのだろうか。ここにマリー・シェーファーの言葉がある。

「聴くことは離れたものに触れる一つの方法である。」

視覚が常に優位となる現代社会において、目に見えるものからのみ理解しようとするのではなく、目に見えないものからも何らかのヒントを得て、理解しようとする。目に見えるものだけを信じるのではなく、目には見えないがその存在感を意識でき、その働きなどを感じとることができるということ。この言葉には、音というものが持つ力（発信側の力）を再認識するということを提案するだけではなく、我々が本来持っている音を聴取する感覚やその力（受信側の力）を再認識せよと伝えているのである。

また生物音響学者クラウス（Krause, Burnie）は、「サウンドスケープとは、ランドスケープの対概念である。我々が世界を見るとき、そこに構造を見出せるのと同じように、音にもその構造を見出せることが出来る。それは生態学的構造とも呼べるものである。」と述べている。ここにあるランドスケープとは目に見えるものの象徴であり、一方サウンドスケープは目には見えないものの象徴として捉えることができよう。サウンドスケープに臨場すること。それはおそらくブラインド・ウォークのように視覚を用いずにランドスケープを感じるということなのであろう。

音を聴くという行為。それは音という目に見えないものを通して、まるで目に見えるかのようにそれを察知し感じることも我々にとって可能である。例えば「きく」という行為にも、一般的に「聞く」と「聴く」の2つがまず挙げられる。「聞く」は「音・声を自然に感じ取る」ということであり、もう一つの「聴く」は「傾聴」という言葉通り、「自発的に耳を傾ける」という意味がある。しかしここではもう一つの意味を持つ「きく」に焦点を当てる必要がある。それは尋ねるという意味を持つ「訊く」である。すなわち「音に訊く」ということなのである。上に記したクラウスの言葉からまさにこれを感じざるを得ない。目には見えない音との対話を重ねることによって、自分自身の感覚を信じるのが可能となり、感じている身体の内存在を識ることとなる。それがひいては音を通して行う自分自身との対話（セルフ・ダイアログ）となるのである。

る。そのプロセスを繰り返し行うことにより、聴くという聴覚を用いた行為は、視覚をはじめとする見るという行為をはじめ、諸感覚を補うことさえ可能となるのであろう。この時点で各感覚器官は連携を図り、まさに「身体知」とも言えるようなインターモーダルな知覚機能を形成する。これが本授業の題目ともなっている「音との対話 自分との対話」なのである。「自分との対話：セルフダイアログ」とは、世界の存在を知り、それとつながるためにまさに全身体感覚を総動員した自分自身を信じながらその対話を重ねている身体やその知にすべてを委ねるということなのである。

この音を題材にした授業だけではなく、大学における初年次の教育そのものがマリー・シェーファーの言及するような学習共同体であるべきだと考えるならば、たとえば「きく」という総合的な知覚行為によって自分の身体やところに触れながら他者のところにも触れることが可能となるのであろう。深く柔軟な大学での学びを保証するためには、受講する学生の現状に従い、そのための適切な環境構築とプログラム検討を重ねていくことが常に求められているのである。

参考文献

吉仲 淳「音との対話、自分との対話 - フレッシュヤーズ・セミナー教育実践報告その1 -」
青山スタンダード論集第3号, 2008

R・マリー・シェーファー『サウンド・エデュケーション』, 春秋社, 1992

R・マリー・シェーファー『教室の犀』, 全音楽譜出版社, 1980

Ward, Kim Soleski, "Musical Soundscape : Teaching the Concepts of R. Murray Schafer to Elementary Students", CANADIAN MUSIC EDUCATOR, VOLUME 50 - 4, 2009